

Title	巻頭言 「文化と超越」再考
Author(s)	清水, 正之
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.1, 2013.9 : 1-1
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4593
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

「文化と超越」再考

キリシタンの宗教史・思想史について、「当時の日本人には超越への飢え」があったとし、キリシタンの教えの浸透を叙述する論文等がかつて多く眼にした。その後、あまり見なくなってきたが、久しぶりに同様の表現をした最近の論文を眼にした。日本の倫理思想をひとつのテーマとする者として、キリシタン伝来の当時の思想史の状況が、室町の比較的早い時期から、超越的なものへの関心と飢えの中にあったということは、根拠とできる資料は文学的美学的表現にもとめるしかないが、ほほいいうことだと考えている。

ルイス・フロイスのよく知られた記録には、無の哲学が天台の高僧たちの間にも深く浸透しているありさま、同時に、町中で活発に活動する神道を含めた諸宗派がえがかれ、他方、諸宗派の哲学的立場・教義に十分に通じた教養人たちをえがき、同時に彼らが、そうした宗教的状况の中で、既成宗派のどれにも心の満足をえられず、相対主義的な態度をとって距離を置いている様、その彼らがあらたに知った教義と世界観に深く心を託するに至る例が、いくつも描かれている。このキリシタンの事例は、フロイス自身の筆が、日本とヨーロッパの文化的差異に及んでいることを考慮するなら、いわば文化と文化とのあいでもあった。そして日本の文化的状況のなかへの、あらたな超越的なものへの差し込んでくる、当の場を描いているといっても良い。

ひるがえって今日の問題として文化を考えると、ポストモダンの文化状況のなかでのポップカルチャー、カウンターカルチャーの意義が強調される。こんななかで「文化と超越」といった視点自体をかたることに、何の意味があるのかという感慨におちいりがちになる。「超越への飢え」という言い方はリアリティーを失っている。

「文化と超越」という視点が、近代日本の哲学的思索のなかで大きな意味をもったのは、大正期から昭和初期にかけてと、戦後の一時期である。ドイツの一九世紀の文化哲学的考察をうけた、大正期から昭和初期の文化哲学、戦後の文化国家の理念も、文化のもつ超越的性格を考察しようとするものであって、いわば文化的理想主義、さらには人格的理想主義と密接に結びついていた。多くの場合、それは結果的には反ないし非の立場をとるに至るとしても、キリスト教的超越性を意識しつつ展開された。三木清は初期に、日本の哲学的歴史研究を妨げているものとして天皇制絶対主義と、仏教的な自然的汎神論を挙げている。彼の「構想力」の概念は、日本の地場で放たれる文化の内在化の傾向に抗しての、文化自体の超越性への着眼と志向とであったといえる。

今「文化と超越」という近代日本の視点の意味と思索の遺産を再考することは、哲学的に、そしてキリスト教の立場にとっても意義あることだと、昨今の状況のなかで考えている。